

2017年1月8日(日)

説教:「幸いな人々」

聖書:マタイによる福音書5章1～12節

まばたきの詩人、水野源三の詩に「悲しみよ」がある。《悲しみよ、悲しみよ／本当にありがとう／お前が来なかったら／つよくなかったなら／私は今どうなったか／悲しみよ、悲しみよ／お前が私を／この世にはない大きな喜びが／かわらない平安がある／主イエス様の／みもとにつれて来てくれたのだ》

小学校4年に脳性麻痺となり、手足、言葉も不自由になった彼が、「悲しみ」でしかないように思える人生が「幸いな人」として最後まで歩んでこられたことを、その詩から教えられる。今年、生誕80年を迎えた(1937年1月2日生)。再び水野源三さんの詩が多く読まれることを願ってやまない。

ここにイエスの言葉として八つの幸いが出て来る。「心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。…」ここは、中々受け入れがたい「幸い」についての言葉も見られる。「貧しさ」や「悲しさ」が何故に幸いなのだろうか？ 実はこの言葉の中には、隠れている言葉がある。見えない言葉がある。それは、主語となるべき「神」が隠れている。「父なる神」の前に「なぜなら」という接続詞を付け加えて読んでみたい。

「心の貧しい人々は、幸いである、**なぜなら、父なる神によって**天の国はその人たちのものである。／悲しむ人々は、幸いである、**なぜなら、父なる神によって**その人たちは慰められる。／柔和な人々は、幸いである、**なぜなら、父なる神によって**その人たちは地を受け継ぐ。／義に飢え渴く人々は、幸いである、**なぜなら、父なる神によって**その人たちは満たされる。／憐れみ深い人々は、幸いである、**なぜなら、父なる神によって**その人たちは憐れみを受ける。／心の清い人々は、幸いである、**なぜなら、父なる神によって**その人たちは神を見る。／平和を実現する人々は、幸いである、**なぜなら、父なる神によって**その人たちは神の子と呼ばれる。／義のために迫害される人々は、幸いである、**なぜなら、父なる神によって**天の国はその人たちのものである。」

この「幸い」なる言葉は、今の私たちの歩みの中にも問いかけている。私たちの人生の歩みの中に、主語となるべき「神」が隠れている事を。私たちの歩みの中に不幸と思える、貧しく、悲しい出来事はあるもの。しかし神がいつも共にあったことを憶える時、それは、慰めとなり、励ましとなり、幸いとなるのではないか。

そして、私たちは同時にもう一つ問われる。それは、あなたは「幸いな人々」の歩みをしているのかと。義に飢え渴いているか、 憐れみ深いか、心は清いか、平和をつくる働きをしているか・・・と。私たちの目には見えない神が共にあることを憶えて、私たちも「幸いな人々」の一人として歩ませて頂きたい。(神谷)